

戦後 81 年 平和への思いを未来へつなぐ ～ 2026 年 中学生 広島平和研修 ～

悲惨な経験を二度と繰り返さないために、そして、平和への願いを未来へつなぐために――。

町は、平成18年9月に「非核平和都市」を宣言しました。

悲惨な歴史を二度と繰り返すことのないよう、また風化させることのないよう、平和の尊さを次の世代へ引き継ぐため、毎年中学生の代表を広島市へ派遣し、平和研修を行っています。

戦後81年を迎えた今年は、8月6日休日の平和記念式典に合わせて研修を実施しました。

8月5日(水)から7日(金)に、長泉中と北中からそれぞれ2人の生徒が広島市を訪れ、平和記念式典に参加したほか、「全国平和学習の集い」や「こども平和サミット」、「とうろう流し」など、この時期にしかできない貴重な体験を通して、戦争の恐ろしさや平和の大切さを深く学びました。





対話によって繋がる

長泉中 笠井 菜々花

黒く焼け焦げた死体、赤錆色に染まった衣服、眼球が剥き出しになった焼け跡の体は、亡くなっているとは思えないほど生々しく、まるで何かを訴えているように見えました。被爆者の方がおっしゃっていた「恐ろしい光景」は、これほどまでに残酷で、自分たちが生きていく日常とはひどくかけ離れたものだ、資料館にて思い知らされた瞬間でした。

私が一番印象に残っているのは、被爆者の宇佐美さんのお話です。その中でも特に「対話をすれば戦争は始まらない。平和は誰かから与えられるものではなく、自分たちでつくるもの」という言葉が心に響きました。

今回、被爆者の方から直接お話を聞いたり、被爆建物を間近で見たりして、本当に貴重な体験ができたと思います。被爆者の方の平均年齢は今、86歳を超えています。これから戦後90年、100年と経過すると、直接お話を聞くことが難しくなると思います。だからこそ、私たちにはあの日のことを後世に伝えていく使命があります。宇佐美さんの平和は誰かから与えられるものではなく、自分たちでつくる

もの」という言葉を胸に、私たちが思いやりや感謝を忘れないようにしたり、戦争について知ったりすることで、少しずつ平和を創っていくことができるのではないだろうか。知る、対話することの重要性を身をもって感じ、一人一人が自分なりの意見を持って互いの意見を認め合うことができれば、きっとこれからも平和に向かっての歩みは絶えず続いていくはずです。
(抜粋)



町戦没者祈念式典

未来の平和のために

北中 三國 隆太

広島では、全国平和学習の集いに参加し、実際に原爆を体験した宇佐美節子さんのお話を聞きました。宇佐美さんは三歳のころ、縁側で遊んでいる時に被爆されました。おばあさんに抱えられて押し入れに避難しましたが、顔にはガラス片が刺さっていたそうです。その後、外に出ると、町は一瞬で破壊され、全身を大やけどした人々が「水、水……」と言いながら歩いていました。

私はこの話を聞いて、原爆は一瞬で人の命や町を奪うだけでなく、その後の人々の苦しみまで生み出すものなのだと知りました。中でも「水、水……」と助けを求める姿が強く心に残りました。

「水、水……」という言葉聞くまで、私は水を飲めることを平和と結びつけて考えたことがありませんでした。けれど、極限の状況で人が求めたのが「水」だったと知り、命をつなぐために必要なものさえ奪われたことの重さを感じました。

私は平和とは、ただ戦争がないことだけではなく、家族や友達と笑い、学校に行き、安心して毎日を過ごせることなのだと考えるよう

になりました。

そして、平和は誰かが守ってくれるものではなく、一人一人が平和について考え、行動することでつくっていくものだと思います。私はこれから、原爆や戦争について学び続け、学んだことを家族や友達に伝えていきたいです。また、自分と違う考えを持つ人の話にも耳を傾け、相手の気持ちを考え、行動したいです。身近な人を大切に、争いを生まないために、まずは自分の周りから思いやりを持って接することも、平和につながる一歩だと思います。(抜粋)



※他の生徒の感想文はホームページをご覧ください。



行政課

989-5500